

⑤黄体機能不全

黄体とは卵胞から卵子が排卵した後にできるもので、実際に名前の通り黄色く見えます。黄体は2種類のホルモン(プロゲステロンとエストロゲン)を分泌します。それらのホルモンにより子宮内膜が肥厚して着床しやすくなります。

黄体機能不全とは

「黄体からのエストロゲンとプロゲステロンの分泌不全により、子宮内膜の液性変化が完全に起こらない状態、それにより着床不全状態をきたす病態」と定義されています。

黄体機能不全の診断

①基礎体温

排卵後に体温が上がる仕組みですが排卵後卵胞が黄体に変わります。黄体から分泌される黄体ホルモン(プロゲステロン)が脳の視床下部の体温中枢に作用して体温が上がります。そのための濃度は3~5ng/ml 以上必要です。

高温相が10日未満の場合は黄体機能不全ということになります。また低温相から高温相に移行するのに4日以上要する場合も黄体機能の異常が疑われます。

②血中プロゲステロン値

高温相の中間期(高温期の7日前後)に採血してプロゲステロン値を測定します。10ng/ml 未満の場合に黄体機能不全と診断します。ただプロゲステロンも日内変動をするため、1回の値で確定せずに少なくとも2周期続けて測定する必要があります。

③血中エストロゲン値

100pg/ml 以上を正常値としています。

黄体機能不全の治療

①卵胞発育促進(クロミッド使用)

クロミッドの良い点として黄体機能不全の治療になるという事があげられます。クロミッド内服により良い卵胞が出来るために、排卵後に卵胞が黄体に変わり、良い黄体が出来ます。その結果黄体ホルモンが増加して黄体機能不全の治療にもなります。

その他セキソビット投与も有効になります。また排卵誘発剤の注射も有効になります。

②黄体賦活法

hCG の注射を行い黄体から内因性のプロゲステロンを産生させる方法です。つまり自分の黄体自身にプロゲステロンを出させるようにする方法です。具体的には排卵3日後位に hCG3000 単位を注射します。これによりプロゲステロンが上昇しその結果体温が上昇します。

③黄体ホルモン補充

実際に足りないホルモンを補充するという考えです。内服と注射があります。内服は高温相の2日目から内服を開始して10日間程度用います。注射は高温相の中ころに行います。

- 1) 内服: デュファストン、ルトラール、プロベラ、ヒスロン
- 2) 注射: プロゲデポー125mg

④高プロラクチン血症(潜在性も含む)を伴う場合

高プロラクチン血症による黄体機能不全に対しては高プロラクチン血症の治療を行います。